虎衛門「Love again～あの素晴らしい愛をもう一度～」

#1 遁走

0点の答案を埋めようと思って空き地に向かうと小学生高学年くらいの子供たちが空のほうに顔を向けて土管の中から頭だけ出していた。

三段積まれている土管のいちばん上の筒の中の子供は右側から、下の二つのうち手前側の筒の子供は左側から奥のほうの筒は右側からはみ出していてそれぞれ、自身の重みで

頭がやや下方に垂れている。こんなこともあったと伸べ太は思った。土管の中からよく空を眺めていたな。

伸べ太は子供たちに気づかれないように塀の陰から空き地の中を覗きこんでいた。さっと埋めてさっと退散するために小さくまるめて握り締めていた答案用紙を鞄の

隙間に押し込んだ。子供たちは無言で目を閉じたり、たまに飛行機の音でびっくりして開いたり、また閉じたりしていた。

こんなこともあったと伸べ太は思った。鞄の隙間にはさまっている答案用紙を右の人差し指で撫でながら、足は自然と学校の裏山に向かっていた。

虎衛門のことは誰も覚えていない。あれほど長い歳月を共に過ごしたというのにそれがまるっきり空白にされてしまったかのようだ。あの一年には信じがたいことだが

伸べ太にとって五年十年ではとても語り切れないほどの思い出が詰まっている。あの日々が永遠に続くものと思っていた。

虎衛門がいなくなった日の夜、伸べ太は母と父に泣いてすがり虎衛門の行方を問い詰めたが二人とも息子の降って沸いたような不可解な言動にただただうろたえるばかりで、

励まそうにも息子の失ったらしいものの大きさすら測りかねていた。翌日学校を休んだ息子の部屋から何か金属質のものが擦れ合う音がほとんど間断なく聞こえてきたが、

夫の留守中に一人で様子を窺いに行くだけの勇気がもはやその妻にはなかった。夫の帰宅後一緒に息子の部屋の襖を開くとそこに机の引き出しを全開にしその中を真剣な

面持ちで見つめている息子の姿があった。机の中は空っぽだった。しばらくすると閉めしばらくするとまた開く、その自動運動を繰り返していた。

やめないかと怒鳴る父親の声が息子にはまるで届いていないようだった。妻は夫の背中でおいおいと泣き出した。

裏山からは小学校の校庭が見渡せる。伸べ太の通っている中学は小学校に隣接していたが、敷地は別々になっていてちょうど小学校の校舎の陰に隠れていて見えない。

放課後の校庭では陸上部の生徒がトラックに沿って走っていた。夕陽で長く伸びた生徒たちの影が楕円状に並んで地面で弾んでいる。

伸べ太は土の上に座り込んで膝の隙間に顎を挟んで校庭をぼんやり眺めていた。両脚は両腕に抱え込まれ、ボール状の答案用紙が手の中で握られている。

木枯らしで枝がざわめき、木の葉が土の上を這い回っている。顎先まで覆っていた襟巻を鼻まで伸ばすと、自分の吐息で口元が温まるのを感じる。

どこへでもドアがあればなと思った。答案用紙を焼却場に直接放りこめるのに。しかしそんなことはその場しのぎにしかならないということは伸べ太にも分かっていた。

来週には三者面談も控えてるのだ。学校の成績が芳しくないのは小学校の頃と変わらなかったがすべてがその通りではなかった。

小学校時代によく遊んだ仲間とは中学に上がりすっかり疎遠になった。恒夫とは同じクラスだったが話したのは一学期の最初のほうぐらいで、次第にお互いに声を掛ける

こともなくなっていった。中学校には恒夫よりも金持ちがいたし小学校の頃のように特別セレブという感じではなくなっていた。

恒夫の周りの友達も社長の息子とか医者の息子とかセレブといった感じの人たちではなくてむしろ少し下品なぐらいに伸べ太は感じていたが、それでもゆっくりと確実に

棲み分けは始まっているようだった。

静香は中学に上がって陸上部に入った。文武両道で勉強も運動もそこそこできて相変わらず真面目だった。

おしゃれとか流行に敏感でスカートの丈を短くしたり眉毛を綺麗にしてみたりとするタイプではなかったから学校でもとりわけ目立った存在ではなく、

私服がダサいとか何度か女子の陰口も耳にしたことがあるが着飾らないところがかえって受けたのか大人しい感じの男子の間では密かな人気があった。

伸べ太もその口で、放課後教室の窓から校庭を走る彼女に熱い視線を注いでいた。

「静香は俺の嫁」とか伸べ太は未だに信じて疑わないふしがあったが、中学に上がってから静香とはまだ一言も口をきいていない。

剛田はサッカー部に入って昔よりもスリムになったせいか女子にモテた。不良仲間とつるんで色々と悪さをしているらしいが、伸べ太に対する暴力はぷっつりとなくなった。

廊下ですれ違うときも言葉を交わすこともなく、すっかり赤の他人かあるいは別の生き物同士みたいになっていた。

上杉は相変わらず勉強が出来て博識だったけれど同じ学年には彼よりも成績のいい生徒が何人もいた。というのは上杉は古代ギリシャ語とラテン語の習得に余念がなく、

文献の渉猟に忙しく学校の勉強どころではなかったからだ。昼休みとか休み時間に図書館の前を通り掛かると、

持ち込みと思われる辞書や外国語で書かれているらしい数冊の本を机の上に広げてノートに書き込みをしている彼の後ろ姿がしばしば目に留まった。

虎衛門のことは皆ことごとく忘れてしまったらしい。虎衛門の名前を出しても皆きょとんとするばかり。絵を描いて見せても面白い絵を書くといって笑われる。

耳がないねとか言うし話にならない。これはいったいどうしたことだろうか、虎衛門に関する記憶だけがすっかり抜け落ちている。あの上杉でさえ知らないと言う始末だ。

集団的な記憶喪失？そんなことが果たしてあるだろうか。何者かの陰謀としか伸べ太には考えられなかった。

だいいち虎衛門は伸べ太を教育する目的で未来の孫から派遣されたのではなかったか。

それなのにおかしいじゃないか、成績が上がらないどころか今や親にも薄気味悪がられる存在だ。虎衛門は義務を果たす手前でどこかへ消えてしまった。

これは何かあったとしか考えられない。未来で何かがあったのだ。この事実に気づいているのはこの伸べ太、野辺伸べ太しかいない。未来を救えるのは自分しかいないのだ。

この時代にもすでに虎衛門に危害を加えたであろう組織の奴らが潜り込んでいるに違いない。その証拠に人々からは虎衛門に関する記憶の一切が消されてしまった。

しかし伸べ太だけがどういうわけか記憶を失わずに済んだというわけだ。虎衛門が守ってくれたのかもしれない。あるいは、この伸べ太に未来への希望を託したのだ。

この伸べ太こそが世界の命運の鍵を握っているのだ。

何か跳ねるような音がして目を開けると、手元から落ちた答案用紙が足元で風に押されて揺れていた。日はすっかり沈み、校庭からは人の姿が消えていた。

伸べ太は答案用紙を拾って広げると皺をのばし半分に折って鞄の中に戻した。帰ろう。伸べ太は山を下りた。

伸べ太の母は伸べ太が0点を取っても怒らなくなっていた。だからもう隠す必要なんてないのだけど過去の習慣で気づくと隠すことを考えている。ほんとうにそうだろうか。

たとえ怒られなくなっても以前にも増して0点を取ると心がずっしり重くなる。街灯が両側から伸べ太を照らし複数の影をつくっていた。

みんなグルなのかもしれない。虎衛門のことを知らないふりをして伸べ太の与り知らないところで着々と秘密の計画を進めているのかもしれない。

下手に虎衛門のことを口にするのは命取りになるかもしれない。奴らの姦計を暴くには十分慎重であらねばならない。焦慮は罪である。

こちらに分があるとすればそれはこちらがまだ奴らの組織の存在を仮に疑いはしていたとしても気づいてはいないと想定しているだろうことだ。

このアドバンテージを利用しない手はない。奴らが油断している隙をついて陰謀につながる手掛かりを少しずつ収拾すればいいのだ。

24時間監視されている可能性も当然念頭に置かねばならない。父や母や当時の仲間たちはすでに奴らに記憶を操作されている可能性があるし、

そうすると電極か何か埋め込まれている可能性だってじゅうぶんあり得るだろう。彼女らや彼らが監視カメラの役割を兼任していないとも言い切れないのだ。

油断はいつでもどこでも禁物である。

しかしどうだろう。彼女たちばかりではない、この野辺伸べ太にも脳内にチップか何かが埋め込まれていないと言い切ることが果たしてできるだろうか。

もし仮にそうだとしてそのせいで伸べ太の考えていることが全部筒抜けになっているとしたらどうだろう、そう考えるとぞっとする。

伸べ太の帰る先ではすでに伸べ太の思考を読み取った組織の連中が待ち構えていて不意打ちを狙っているかもしれない。

と、この考えさえも読み取られている可能性があるのだ。とするとすでに組織は伸べ太の逃走を見越してこちらに向かっているかもしれない。

奴らのことだから強行手段に打って出ないとも限らない。いよいよ本性出したなとばかりに目の色変えて捕まえにくるかもしれない。

しかしチップを埋め込まれているとしたらどこに逃げても無駄だ。もう何もかも手遅れなのだろうか。しかし捕まったらそれこそ何もかもおしまいだ。

今はとにかく逃げなければ。

伸べ太はとっさに踵を返し家とは反対のほうへ全速力で駆け出した。

#2 写経

大学の友人に卒業アルバム掲載用の写真撮影に協力してほしいと言われ、車で四五十分かけて方広寺へ行くことに。

急な坂を車でぐるぐる回りながら山をのぼると赤い建物がみえてくる。あとで知ったが三重塔とかいうらしい。駐車料金は五百円。

駐車場から登ってきたほうとは反対側の坂を下るとそのへん一帯が寺になっている。坊主のお経が大音響で流れていた。

正月だから特別かと思ったけど見ると声はスピーカーから流れていて、テープか何かだろうからこれなら特別でなくてもできると思った。

おみくじを引くと吉。「運勢は登り坂。部屋いっぱいに陽がさし込んでくる状態にあります。しかしここで注意しなければならぬことは、

表面的にはきれいにみえてもその真意がなかなか掴み難い事柄に出合うことが多いことです。いたずらに手を出してはいけません。よく物事を見極めてから動くように。

何事も距離をおいて見よ。」

おみくじの棒が何本か地面に落ちていて自分が落としたのか、隣でくじをやっていた友人が落としたものなのかわからなかったが、とりあえず拾って筒に戻しておく。

窓口で写経をできるか聞くと眉毛を寄せて担当者がいまいないからわからないという。五分くらいで戻るというから、五分後くらいにまた来るというと

それはちょっと難しいかもしれないというようなことをいう。坊主も正月は時間で動いてるからみたいなことをいって、「待ってたほうがいいですかね」と言うと

「そうですね、そうしてください」と言われる。しかし担当らしい坊主は物の数秒くらいでひょっこり奥から現れて写経できるという。

写経室は正月の荷物か何かが置いてあるとのことで奥の間に通される。

イベントのときによく使われる長机とパイプ椅子みたいな椅子の並ぶ部屋で本棚には古い経典みたいなものの束と幼児向けの絵本が並んでいた。

写経の功徳は心の安定だ、一字一字粘っこく書くみたいな話を聞いてから、坊主と一緒に般若心経を読んでいよいよ写経に移る。

粘っこく書いていたら一時間以上かかってしまった。坊主が何度も覗きにくるから迷惑がかからないように後半はペースアップして心乱した。

書写したお経は奉納してもらうことにした。そのあと寺の中を見て何枚か友人のスナップショットを撮って寺は良しとした。赤い塔は最初は気づかなかったのだけど、

どこだろうどこだろうと言いながら帰ると駐車場の真横に立っていたから最後に友人と一緒に写真におさめておいた。

寺のあとは友人の立てた当初のプランではロケ地をガーデンパークに移しての撮影ということになっていたが、寒いし遠いしもういいにしましょうかという流れになって

いいになった。

代わりに近くで何かないかということでフルーツパークはどうかということになったので行ってみると休業中で、代わりの代わりで森林公園に行くことになった。

森林公園に着くと何やら子供たちの声が聞こえてきて楽しそう。森林アスレチックという看板の前に友人を立たせて一枚撮る。

しかし中を覗くとどうも子供の遊び場みたいで、この寒いときに入場料払って子供に混じってアスレチックを満喫できる自信がなかったから、

どうしましょうと言うと友人もどうしましょうねと言ったから、遊んだということにして帰ることにした。

友人を「また遊びにきてね」と書かれたアーチの下に立たせて撮影した。門の両脇には門松もあって正月らしくて良かった。

どうしましょう戻りましょうかと言うと、近くに温泉がありますと言い出して、行きたそうにしていたので次の目的地を温泉として助手席で地図を読んでもらった。

温泉の前で友人のショットを撮って入ったということで帰ろうと思ったらお湯につかりたいようだったので友人の入浴中ロビーで待機することに。

待機中に売店でお土産として岩塩としょうが湯を購入。

そのあと、カラオケに行ったりビールをもらったりして一日が終わった。

家に帰ってカウンターを見ると年賀状が届いていた。いつも零枚で、今年は犬にも年賀状が届いていて交友関係犬以下と思ったけど自分にも一枚来ていた。

差出人の名前は野辺伸べ太。中学以来久しく会っていないが、古い友人の名前であった。裏には青い頭の生物が描かれていた。

生物の頭の右上と左上にはそれぞれ、「思い出せ」、「虎衛門を救えるのは僕たちしかいない」と言葉が添えられている。

#3 Re:MEMBER

連休を利用して京都へ。

お昼頃発ち二時間弱で到着。こだまだったからちょっと遅い。

駅を出てまずはホテルにチェックイン。去年出来たばっかりみたいで綺麗な部屋。窓からの景色はビルに阻まれてる。

そもそも駅の南側はホテルとかビルとか道路とか雑然としていて見渡してみても綺麗なものじゃない。五重塔があるぐらい。

「ツネオキレイダネ」

恒夫は黙って荷物の整理をした。男は一人で楽しそうにしている。

鍵はカードキーになっていたから念のため携帯と一緒にしないようにと恒夫は男に言った。男は「ドウシテ」と恒夫に言った。「念のため」と恒夫は言った。

外に出て駅の南を西に向かった。途中からちらほら人足が増えて正しい方向に向かってると確信。

ただ西に歩けばいいだけだけど恒夫は方向音痴だから西と東を間違えてしまうことがある。南北さえ間違えたことが一度ならずあった。

「カワノナガレヲミレバイイノニネ、バカダネツネオハ」

京都の道は分かりやすいというけど恒夫は何度も京都で迷子になった。歩いても迷子になったし自転車でも迷子になった。

三十分もあれば着くところを半日かけてようやく着いたこともあった。そういうことはしょっちゅうあった。

交差点の向こうに稲荷大社とかいう神社があった。名前は有名そうだけど入ってみると何もない、ただの公園みたい。小さい社の前に立ってすぐ引き返す。

鳩が歩いていた。

「ツネオハトダヨ」

「クリプトコッカスとよぼう」

「プリクトココス？」

「鳩の糞にはクリプトコッカスというのがいるから」

「フーン」

人の後について歩いてると五重塔が見えてくる。東寺に来るのは初めてだった。駅の南側はあんまり来たことがなかった。

一通り見て帰ることに。拝観料のかかるところには入らなかった。

坊主の肥やしになると言うと「マタツネオハソンナコトイウ」と言われる。

池に鴨が泳いでいて若いカップルがしゃがみ込んで携帯で写真を撮っていた。男も「カモダヨ！」といって水面にカメラを向けていた。

もう少し先の方に行くとクチバシの長い白い鳥がいて水の中を見つめる姿勢で静止していた。

「ホンモノカナ？」「そうだね、白鷺かな」最初は全然動かないように見えたからつくりものかと思ったけど、よく見ると微妙にクチバシの先が動いていて本物と分かる。

東寺を出て、帰りは割と最近出来たイオンを横切って行くことにした。

イオンに入ると、ただ横切るつもりがヨシオが服見たいと言い出すから寄って行くことになった。「ヤスイネ！コレイイネ。コッチモイイネ」

イオンを出て駅を通り越してバス停へ。四条河原町へ向かう。

本屋が潰れていたりマルイができてたり、いろいろ変っていた。

クレープ屋があってヨシオが食べたいと言ったが今買うと邪魔だから後で買おうと言う。ヨシオはしぶしぶ同意する。

四条～三条河原町の散策の後、ホテルでもらったサービス券を持ってヤツハシ本店に行く。お店に入ると京風の赤いシートと傘みたいなのが立ってる席に案内される。

簡単な和菓子とお茶を振舞ってもらった。

「オイシイネコレ！ナントイウノ？」「なまやつはし。あと豆かな？」

土産屋に行けばタダでいくらでも試食できるようなものだけど、ちゃんとした器で出されるとなんだか赴きがあって悪くない。

お店を出た頃にはもう外は真っ暗だった。バスで駅まで引き返す。ヨシオの欲しがっていたクレープは結局ヤツハシ本店に行く前に買ったからすっかり冷めている。

ついでになんとかというお店のカルネという有名なパンも買った。

ホテルの帰り途、酒屋があったから通り掛かりにワインと珍しい外国のビールを買って帰る。

シャワーを浴びてから二人でパンとかクレープを食べながら酒を飲む。

ワインは日本の確か京都ゆかりのワインみたいだったけど、独特の苦みがあってあまりおいしくなかった。ヨシオもワインを飲みながら首をかしげた。

ビールはチェリーの入ったフルーツビールで甘くておいしかった。すごく辺鄙なところにあったけどいい酒屋だと思った。他にもいろいろ珍しいお酒が置いてあった。

二日目の出発はヨシオの排便後のレストルームがあまりに臭くて長引いたせいで遅くなった。

三十三間堂には弓を持った袴姿の人たちがたくさんいた。

拝観料が無料になっていて出店が出ていてやけに賑やかだと思ったら、成人式で通し弓とかいうイベントをやっているらしい。

弓を持った袴の娘たちが取り囲まれて写真を撮られていた。いろんなポーズを要求されているようでいろんなポーズを取っていた。

ちょっと秋葉原みたいだと思ったけど撮ってるのはおじいさんとかだった。

出店の立ち並ぶ砂利道の裏が境内で、コンクリートに座って成人が何か食べたり話したりしていた。

車椅子に乗った成人の子が砂利道で押してもらっていたけど、通りにくそうにしていた。押している子も押されている子も華やかだった。

前来たときは森閑としていて、お堂の中もするする歩けたけど今日は狭い廊下を横に何列にもなってひしめき合って歩かなければならなかった。

向かいの国立博物館でもちょうど空海の特別展をやっているみたいだったから入ってみた。

弘法にも筆の誤りというからどんなものかと思ったけどよくわからなかった。空海の筆とされていたが実は最澄が書いたらしいというものもあった。

空海に興味はあるけどこういう資料にはまったく興味がわかない。気にならないわけではないけど、そもそも博物館で時間をかけてじっくり見ることができない。

だんだんそわそわしてくる。人がたくさんいて落ち着かない。どうも博物館という場所とか構造になじめないらしい。そんなおおげさな話ではないかも。

やっぱりたんに興味がないのかも。反対にヨシオは一つひとつじっくり見ていた。言葉はわからなくても面白いらしい。

博物館では鴨長明の方丈記の自筆全文も展示されていた。「ユクカワノナガレハタエズシテシカモモトノミズニアラズ/ヨドミニウカブウタカタハカツキエカツムスビテ

ヒサシクトドマリタルタメシナシ」

全部片仮名だとは知らなかった。

あと昔の詩人の夢日記とか金色の墨で書写されたお経とか見て博物館は終わり。

出る頃には一時近くになっていた。祇園でお昼を食べようと思ってたのに間に合うか心配になってきた。

急いで祇園へ向かう、といってもバスだし混んでるからなかなか着かなかった。目当ての店に行くと、店の扉は開いているのに店の人も客も一人もいなかった。

外でランチのメニューを見ているときに、店の中から出てきた人がいたけどその人が料理人？だったのかもしれない。

出てくるときに二人を見て「びっくりした」といって寒そうに手をすり合わせてどこかに消えていった。

あきらめて建仁寺の近くのお店に入ってみることにした。行ったことのない店だから中の様子も見えないし不安だったけど入ってみた。

入ってみると認知症みたいなおばあさんがトイレに行くのに連れの人に座椅子ごと引きずられて玄関を横切っていった。おばあさんは悲しそうな声を出していた。

居酒屋みたいにちょっとがちゃがちゃした感じで作っているのは若い人たちだった。途中でおばあさんが椅子ごと戻ってきてまた悲しそうな声を出した。

連れの人が「デザートはまだかかるの？まだならもう出ますから」とおばあさんを引っぱって店を出ていく。

お昼を済ますと二人は八坂神社に向かった。そこにも成人の人たちがいて出店も賑やかだった。

そのまま円山公園に入り、桜も咲いてないし適当に見ると北のほうに歩いていく。

知恩院はメインのお堂が修理中みたいで、建物の外が板で包囲されていて全然見えなかった。

見物に来た人たちは板の前の修理中ですよという説明書を見て時間を潰していた。恒夫もヨシオがトイレから出てくるまでの間他の人と同じようにしていた。

「ツネオオマタセ！」

スピーカーから念仏が流れていて生の坊主はどこにもいなかった。

知恩院を出てもうちょっと北に進んだところに今度は親鸞を崇め祀ってる寺があるけど拝観料を取るからスル―して先へ。

坂を下ると遠くのほうに大きな赤い門が見えてくる。平安神宮の周辺は景観を損ねないための配慮からかコンビニとかガソリンスタンドまで古風なつくりになっている。

屋根は瓦が敷いてあるし、コンビニは本来駐車場にあたるスペースがテラスみたいになっていて例の赤いシートに傘がささってる京都でよく見かける感じの席が設えてある。

梅とか桜とか綺麗な時期ならよかったけど、梅はもう少し先だし見る花もないから手を合わせたらそのまま引き返した。平安神宮はなんであんなに砂利が多いんだろう。

歩いて銀閣寺まで行くつもりだったけど、ちょうどバス停があったからちょっと疲れてきたしバスに乗ることにした。

バスに乗ってみると銀閣寺まで意外と距離があることがわかった。

以前来たとき八坂神社から哲学の道、銀閣寺経由で京大まで歩いていったことがあったけどこんなに遠かったとは思わなかった。

よく考えたらあの時も半日くらいはかかっていたのかもしれない。ヨシオは銀閣寺が初めてだから興奮していた。苔がきれいだよと言った。

もう四時を回っていた。

銀閣寺前の坂道には道の両側にお店が並んでいて呼び込みをしている人もいるけど、清水寺の前ほど賑やかではない。時間のせいもあるかもしれない。

銀閣寺に着くと入り口に立ってる警備員みたいな人が両手を振っておじぎをした。今日の拝観はここまでということらしい。

まだ拝観時間は過ぎていないし、ほんの数秒の差で入れないと思うと悔やまれる。ヨシオがトイレに行っていなければ入れたのだから。

客が途切れたところで入館締め切りにすればいいのに。「ザンネンダッタネー」

日が傾いていた。帰りはせっかくだから哲学の道を通って京大に向かうことに。

以前入ったパン屋や喫茶店が今もあった。吉田キャンパスに入ってたローソンが別の店になっていた。

カフェテリアルネが工事中で百万遍の角のお店がドラッグストアになっていた。かつて住んでいたアパートはそのままだった。近くのかつ丼の店や喫茶店もそのままだった。

バス停の前にいたら京大のOBという人に道を尋ねられた。同窓会があるのだという。笑顔で去って行った。

帰りのバスはすし詰めでヨシオの息が耳元にかかった。ヨシオは図体がでかいから、降りていく人の邪魔になって「スミマセン」「スミマセン」と言っていた。

今晩は駅のホテルで食べることになった。昼とかぶるけどせっかくだからとまた京料理になった。時間が押してるらしく次から次へと料理が出た。

昼もそうだったけど、のんびりしてるとついラストオーダー直前の入店になってしまう。料理の説明もたまに当たり前のように飛ばされたけど料理はまずくなかった。

仲居さんの試合運びは完璧で、始まりはばらばらだったのに四つのテーブルがほぼ同時に食事を終え、閉店時間にはすべて客がはけるようになっていた。

「イイカンジダッタネー」

帰りはまたなんとかという老舗のパン屋で朝食用のパンを買って帰ることに。また昨日の酒屋で珍しいお酒を買いたかったけどもう閉店してて買えなかった。

代わりにホテルの自販機でカンチュウハイを購入。

次の日、お土産を買っていたら土産屋のおばさんにつかまって断れずにいたら乗るはずの新幹線に乗り遅れた。

指定席の乗車券だったけど、自由席に換えてもらって次のひかりで帰ることになった。それまで駅の中の喫茶店で過ごすことに。

ヨシオは「ツネオハコトワレナイノカ」と言った。「断るより買っちゃったほうが早いからなあ」

「カモラレルヨ」

帰りの電車は疲れて寝てしまった。ヨシオは音楽を聴いていた。

改札を出てヨシオは「マタイコウ！」と言って手を振った。この日は寒くて恒夫は親が来るまで襟巻に顔をうずめていた。